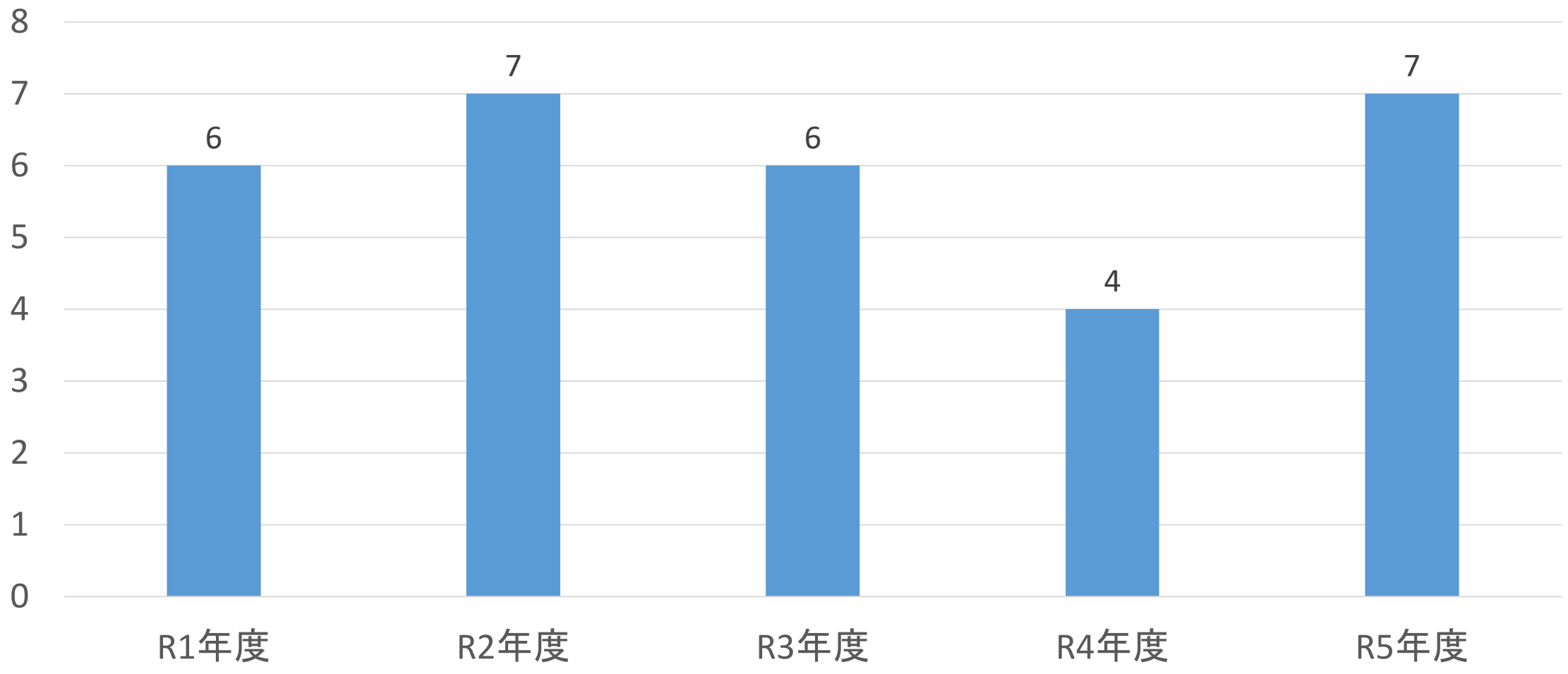
令和7年2月4日
令和6年度　第2回AYA世代がん医療部会

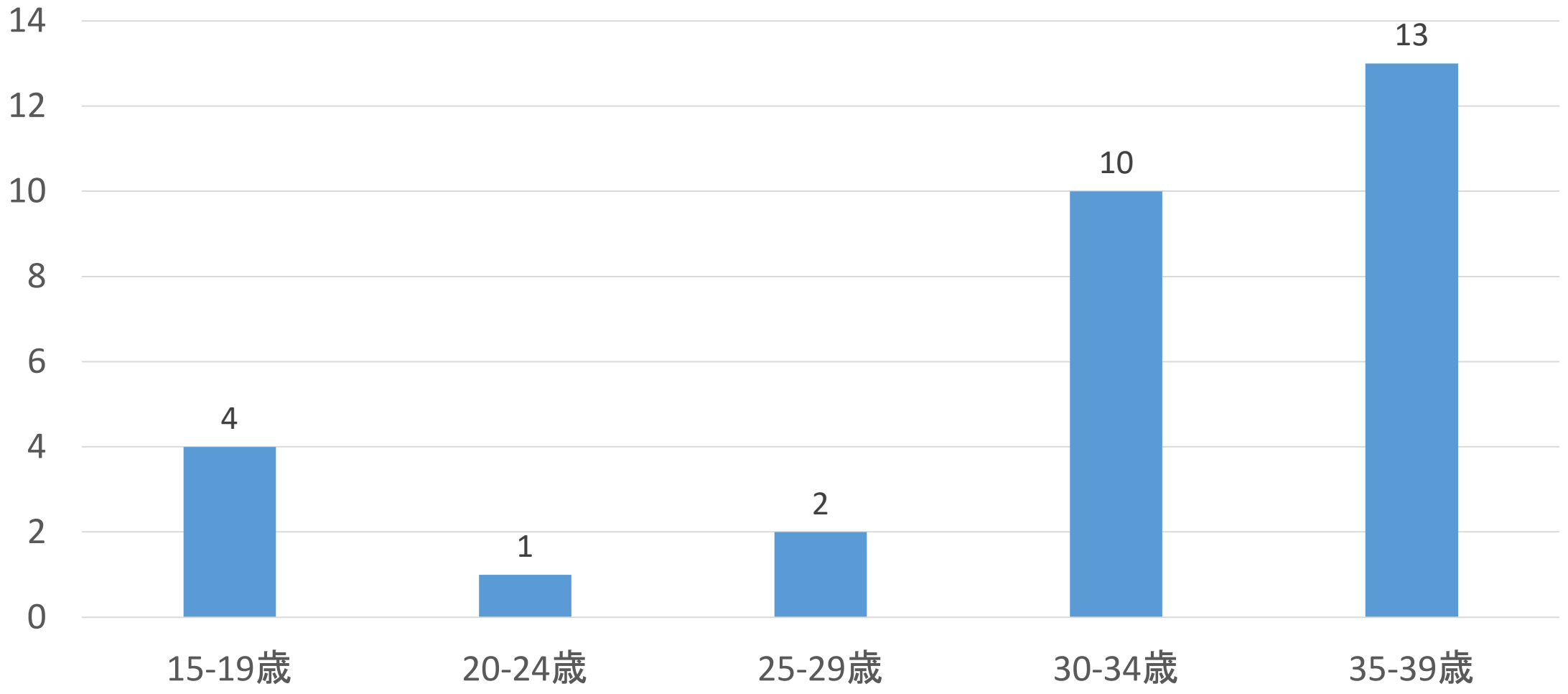
当院における5年間のAYA世代がんについての検討

由利組合総合病院　産婦人科
齋藤史子

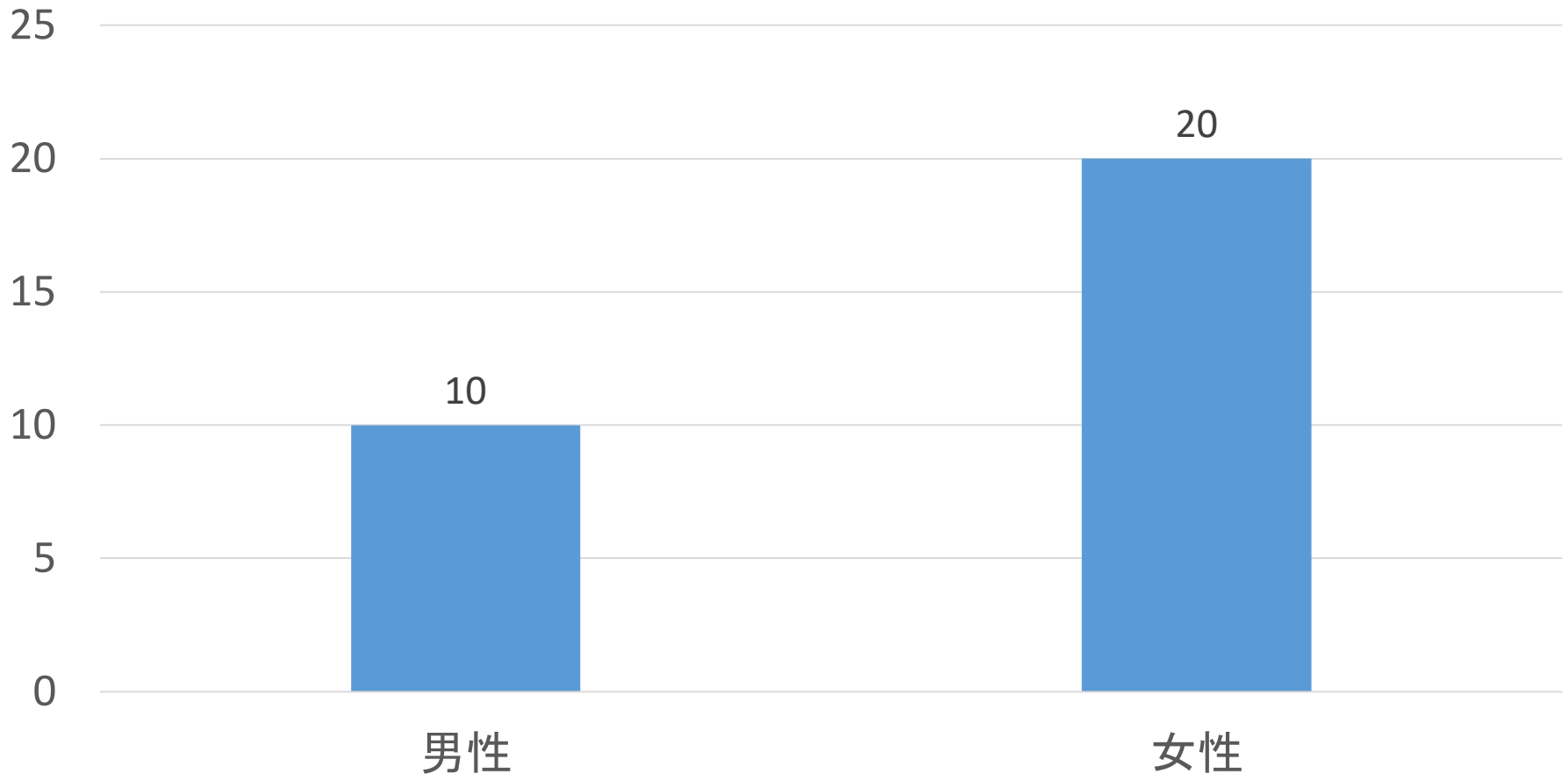
年度別AYA世代（15～39歳）がん患者数



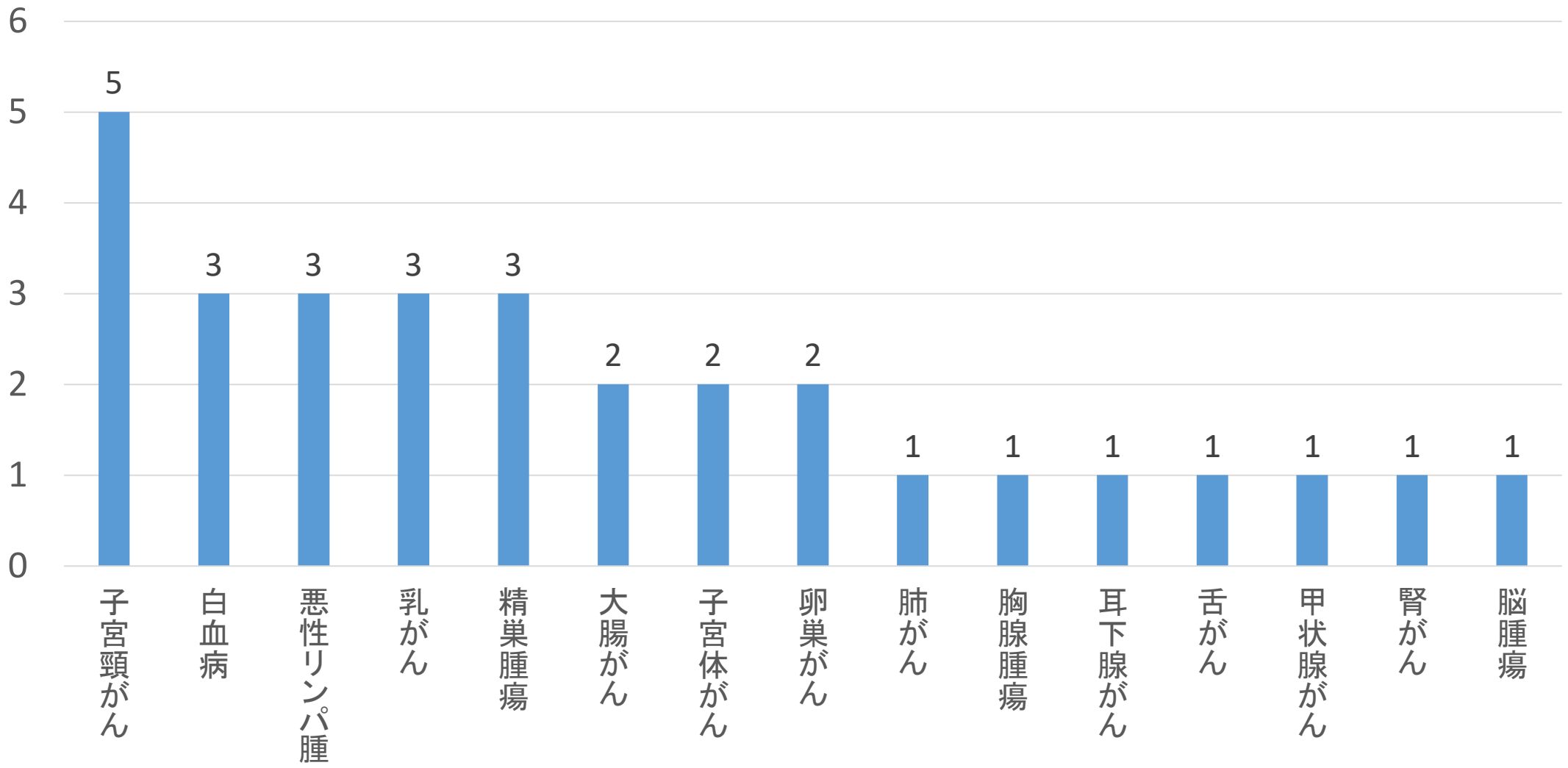
年齢別AYA世代がん患者数



男女別AYA世代がん患者数



疾患別AYA世代がん患者数



年齢別　疾患の内訳

15～19歳

- 白血病　2例
- 悪性リンパ腫　2例

20～29歳

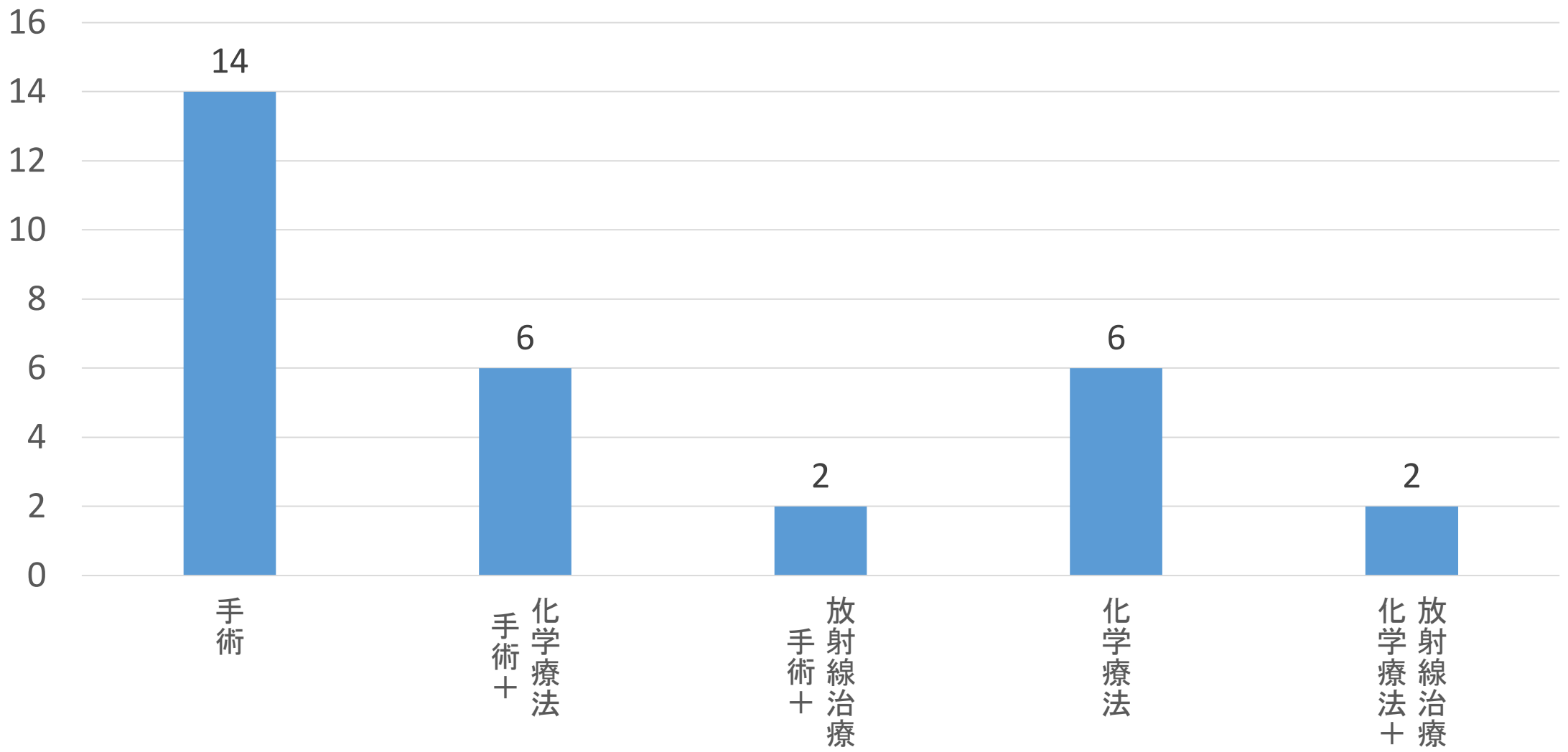
- 耳下腺がん　1例
- 精巣腫瘍　1例
- 子宮頸がん　1例

年齢別　疾患の内訳

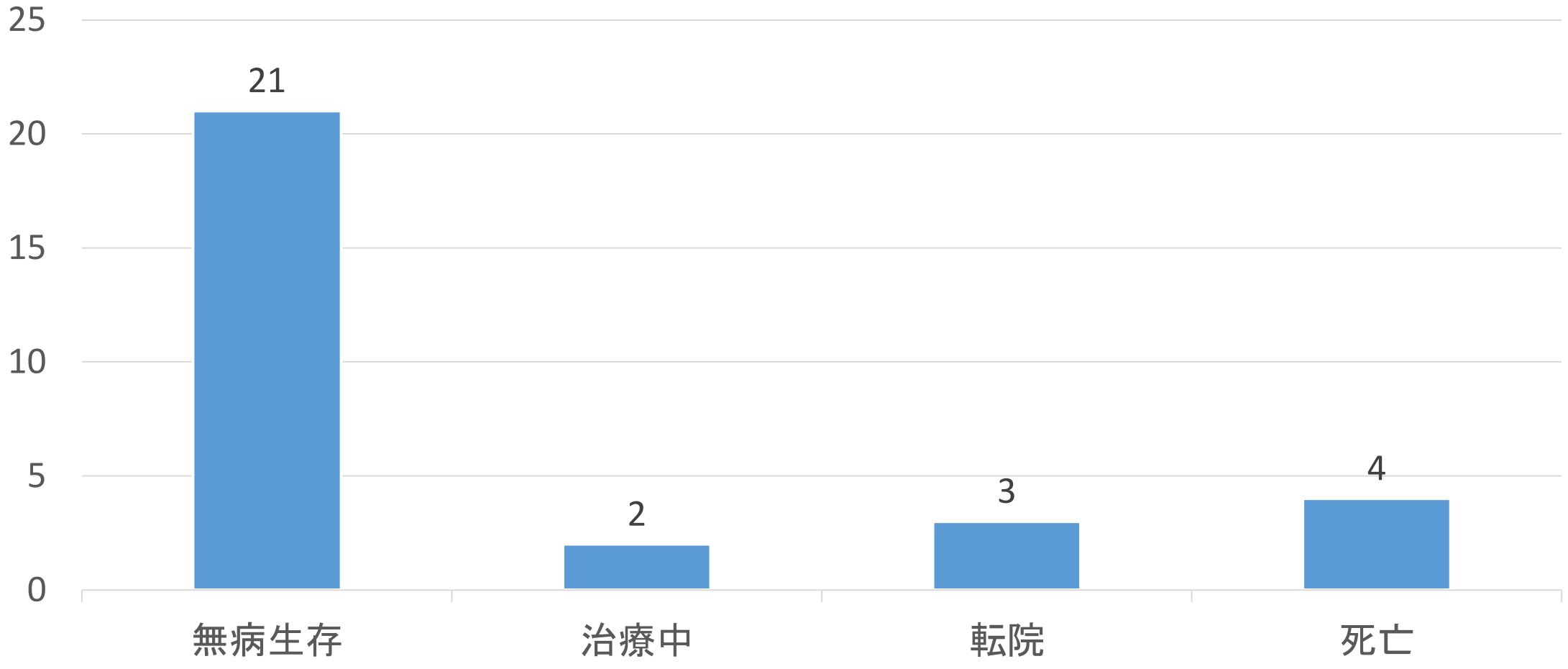
30～39歳

- 子宮頸がん　4例
- 乳がん　3例
- 大腸がん　2例
- 子宮体がん　2例
- 卵巣がん　2例
- 精巣腫瘍　2例
- 白血病　1例
- 悪性リンパ腫　1例
- 肺がん　1例
- 舌がん　1例
- 甲状腺がん　1例
- 腎がん　1例
- 胸腺腫瘍　1例
- 脳腫瘍　1例

AYA世代がん患者の治療法



AYA世代がん患者の予後



妊孕性温存治療

・妊孕性温存治療を施行した症例は1例

・15～19歳　男性　血液悪性腫瘍

X月Y日　発熱、血液悪性腫瘍疑いのため入院

Y+2日　診断確定、本人と家族に診断・治療方針を説明

妊孕性温存治療について情報提供、希望あり

Y+6日　秋田大学医学部附属病院で精子凍結保存

Y+13日　化学療法開始

妊孕性温存治療

・その他の症例は、
治療内容から妊孕性温存治療を要さない症例
がんの進行度、既往歴から治療が行われなかった症例
分娩歴があり治療を希望されなかった症例　に大別された

・子宮全摘出術を施行した症例が8例あった

・妊孕性温存治療を施行しなかった理由が不明な症例がみられた

AYA世代婦人科がんの症例

症例	年齢	疾患名　病期	治療法	分娩歴		予後
1	30歳代	子宮頸がんⅣB期	放射線、化学療法	1産	未分化癌、脳転移	死亡
2	30歳代	子宮頸がんⅠA1期	手術（単純子宮全摘出術）	3産		無病生存
3	30歳代	子宮頸がんⅠA1期	手術（準広汎子宮全摘出術 ＋骨盤リンパ節郭清術）	2産	リンパ管侵襲あり	無病生存
4	20歳代	子宮頸がんⅠA2期	手術（準広汎子宮全摘出術 ＋骨盤リンパ節郭清術）	2産		無病生存
5	30歳代	子宮頸がんⅠA1期	手術（単純子宮全摘出術）	2産		無病生存
6	30歳代	子宮体がんⅠA期	手術（単純子宮全摘出術 ＋両側付属器摘出術）	0産	子宮筋層浸潤あり	無病生存
7	30歳代	子宮体がんⅠA期	手術（単純子宮全摘出術 ＋両側付属器摘出術）	0産	薬物療法で副作用	無病生存
8	30歳代	卵巣がんⅠA期	手術（子宮全摘出術＋両側付属器 摘出術＋大網切除術)	0産	粘液性癌 根治術希望	無病生存
9	30歳代	卵巣境界悪性腫瘍	手術（子宮全摘出術＋右付属器 摘出術＋大網切除術）	1産	左付属器摘出術後再発 粘液性境界悪性腫瘍	無病生存

HSIL/CIN3について

- 子宮頸部高度扁平上皮内病変 High-grade squamous intraepithelial lesion（HSIL）/子宮頸部上皮内腫瘍 Cervical intraepithelial neoplasia, grade 3（CIN3）
- 子宮頸部扁平上皮癌の前駆病変
- 治療：子宮頸部円錐切除術、子宮の温存が可能

- 当院で5年間で35例のAYA世代患者が罹患
- 年齢：26歳～39歳
- 分娩歴：なし 5例、1産 11例、2産 14例、3産 4例、4産 1例
- 発見契機は27例（77%）が検診、8例（23%）が自覚症状あり受診

- 全例が子宮頸部円錐切除術を施行
- 手術後に5例が分娩、2例が現在妊娠中、1例が不妊治療中

まとめ

- 当院で5年間に治療を開始したAYA世代がん患者は30例であった
- 妊孕性温存治療を行った症例は1例であった
- 妊孕性温存治療を希望する患者が適切に治療を行うことができるよう、医療者へも情報提供を行っていく必要がある
- 子宮頸がんの症例が最多であった（HSIL/CIN3の症例が35例）
- 子宮頸がん予防のため、検診とワクチン接種について啓発を行うことが重要である